

極端な議論にみる中国人の諦め

● 放 眼 日 中

先日、一回り以上も年下の中国人男性と北京でお茶を飲みながら雑談した。彼はお茶を愛し、文化人の雰囲気のある人だが、話をしていくうちに中国の悪口がどんどん飛び出してきた。

「中国の教育には問題が多すぎる」「中国の格差は大きすぎる。我々庶民は、経済発展の恩恵を全く受けていない」などなど、筆者も日頃から感じていることなので頷いていると止めどなく溢れ出てくる。

そして「中国の伝統文化は偉大だ」「我々はその文化を破壊してしまった。漢字をあんなに簡略化するなんて」「文革で破壊され、改革開放で金儲け一辺倒になり、古き良き伝統は失われた」と、政治・経済論から文化論へと進んだ。

ますますもつともだと相づちを打ち、「いや、日本も伝統文化

がかなり失われてきていて、問題なんだ」と言うと、突然「そんなことを言っただけじゃない。京都は素晴らしい！」と言いだした。

「日本には文化がある。特に京都は特筆すべき伝統文化が存在し、日本人の発展を支えている」と彼は強調する。具体的には京都のどこが素晴らしいのか聞くと、「鯉の伝統的な育て方が凄い」「90歳を超えた料理人の技が半端ではない、芸術だ」とそれまでの冷静さが失われ、まくし立ててきた。

一体どこからそんな情報を得たのだろうか。よくよく聞くと、彼のお客の中に京都出身の60代の男性が1人いるらしい。その人に京都の良さを教えられ、興味を持ってネットで検索などした結果、出てきた情報を披露したということだ。実は彼、京都はおろか、日本にも行ったことは

ない。京都は確かに素晴らしいと思うし、日本の良さを認識しようと思う心が調べてくれたことは有難いことだが、これだけの情報で一つの地域のみを絶賛されるのには、かなり困惑した。

彼のように、日本を絶賛してくれる中国人にはこれまでも何人か会ってきた。ただ40〜50代以上の人が多い。1980年代に青春時代を過ごした中国人は日本の映画やドラマを見て、強い憧れを持っていた。90年代に子供だった人々は日本のアニメに夢を乗せた。それはまるで、日本人がアメリカのホームドラマを見て、「あんな家に住みたい、あんな生活がしてみたい」と思ったのと似ているのかもしれない。

筆者は、「中国に対して自らはニートラルだ」と思っているが、正直に言うと最近では「できれば中国に

は行きたくない」と感じる人が多い。確かに大気汚染も深刻だし、食品の安全問題もある。ネットなど情報管理にウンザリすることも多いが、その理由を明確に説明することは難しく、「ある種の感覚」としか言いようがない。何となく圧迫感があるのだ。

日本人がそう感じているのだから、中国人はもつと強く感じている可能性がある。前述の彼の、ちよつと異様なまでの京都への憧れ、それは言うまでもなく、「中国の現状への憂い、諦め」に繋がるのだろうか。高度経済成長の中で夢を見てきた庶民は、安定成長への移行を図る政府の姿勢を見て、大いなる絶望を味わっているのだろうか。習近平政権が掲げた「中国夢」というスローガンは誰の夢なのだろう。



コラムニスト・アジアウォッチャー
須賀 努

すが・つとむ 東京外語大中国語科卒。金融機関で上海留学、台湾2年、香港通算9年、北京同5年の駐在を経験。現在は中国を中心に東南アジアを広くカバーし、コラムの執筆活動に取り組む。